

2025 年 5 月 4 日（日）「死に至るまでも」

ヨハネの黙示録 12:7-12

7 さて、天で戦いが起こった。ミカエルとその天使たちが竜に戦いを挑んだのである。竜とその使いたちもこれに応戦したが、8 勝てなかった。そして、もはや天には彼らの居場所がなくなった。9 この巨大な竜、いにしえの蛇、悪魔ともサタンとも呼ばれる者、全人類を惑わす者は、地上に投げ落とされた。その使いたちも、もろともに投げ落とされた。

10 そして私は、天で大きな声がこう語るのを聞いた。「今や、我々の神の救いと力と支配が現れた。神のメシアの権威が現れた。我々のきょうだいたちを告発する者、我々の神の前で昼も夜も彼らを告発する者が、投げ落とされたからである。11 きょうだいたちは、小羊の血と自分たちの証しの言葉とによって、この者に勝ち、死に至るまで命を惜しまなかった。12 それゆえ、もろもろの天と、そこに住む者たちよ、喜べ。地と海には災いあれ。悪魔は怒りに燃えて、お前たちのところへ降って行った。残された時間が少ないのを知ったからである。」

【序論】

今日は「地上の教会の霊的戦い」に注目してみましょう。私たちは日々、自分の中で「見えない敵」との戦いを繰り返していると思います。その戦いは、私たちが信仰から迷い出させようとする力との戦いであって、私たちの弱い部分が狙われる傾向があります。誘惑に陥りやすい部分、過剰反応しやすい部分、罪に至りやすい部分……。同時に、世界の大きな潮流の中で、主なる神様を礼拝する道を閉ざそうとする力も働いています。それらの力は私たちが気づかないところで囲い込み、神の御心から逸れさせようとする力が働いています。だから、私たちはいつも霊的な感覚を研ぎ澄まし、今世界で何が起きているか、歴史はどこに向かっているのかを見極めつつ歩んでいきたい。今日のテキストを読み解いてまいりますと、これらのことがだんだんと見えてくるかもしれません。

【本論】

今日の箇所を文脈で見ると、12 章の冒頭に出てきた「一人の女」が「男の子」を産んだという記事が続いていることが分かります。思い起こしていただきますと、「一人の女」とは第一義的に「旧約におけるイスラエル十二部族」を表しており、第二義的には「新約の時代に形成された主イエスの十二使徒に代表される教会」を意味していると説明させていただきました。「男の子」はキリスト、そしてその「男の子」を食い尽くそうとしていた「赤い竜」とは悪魔を指します。地上で権力を持っていた悪魔の支配権が神の子に取って替えられることを阻止しようとしたのです。この主イエスと悪魔の戦いを別の角度から説明しているのが今日の記事です。

本論 1. 天上の戦い

さて、天で戦いが起こった。ミカエルとその天使たちが竜に戦いを挑んだのである。竜とその使いたちもこれに応戦したが、勝てなかった。そして、もはや天には彼らの居場所がなくなった。(12:7-8)

地上での主イエスと悪魔の戦いは、天上で繰り広げられている霊的な戦いというもう一つの側面を持っていました。「ミカエル」は、ダニエル 12:1 に出てきた「大天使長」で、終わりの日の苦難からイスラエルを救い出すと言われていました。注解者によっては、ミカエルとはキリストご自身を指すのではないかと考える人もいて、それほどに「メシア的」な性質を持っていると言えます。ヨシュア 5:13-15 にも「ミカエル」と思しき人物が登場しますが、そこでは「**主の軍勢の長**」と呼ばれています。いずれにせよ、ここでは悪魔が支配してきた世界に神の子が来られたという出来事を表していて、悪魔は配下にある悪霊たちを従えて抵抗を試みたのです。悪魔はどういう意味でキリストと戦ったのでしょうか。悪魔の働きは大きく三つにまとめられます。まず、多くの人間を罪の縄目で縛り、身動き取れなくしていた。それを象徴する出来事が、悪霊に取り憑かれた人々が多くいたことであり、主イエスが彼らをことごとく解放していかれたことです。次に、悪魔はユダヤ教の指導者たちを使って、聖書の解釈を歪め、律法によって民衆の生活を縛っていました。聖書のことばは本来人が神を愛するために与えられましたが、かえって神を愛せない状態へと人を追いやるものへと変容させられていました。主イエスが山上の説教の中でその誤りを一つひとつ修正していかれたことは、人々が「神を愛する道」へと引き戻されていったことを意味します。更に、悪魔は巧妙な罠を仕掛け、主イエスを神に従う道から足を踏み外させようとしていました。それは、主イエスが地上に来られた使命、十字架に至る従順を父なる神様に対して示し、神への義と愛を貫徹し、多くの人の罪をご自分の血潮で洗い清めるというビジョンを捨てさせようとするものでした。そのような茨の道によってではなく、悪魔と手を結ぶことによってもっと安易に世界を支配しようという誘いをかけたのです。それが、荒野の誘惑における三つの提言の本質でした。この贖いを阻止しようとする悪魔の力は、十字架のその瞬間に至るまで及び、「もしお前が神の子なら十字架から降りてこい」という民衆の叫びを通して、最後の最後まで主イエスに戦いを挑み続けました。しかし、主はこれらの激しい戦いに打ち勝ち、死に至るまで父なる神様に対して従順を示し、信じるすべての人にご自身の「義の衣」を着せる道を切り拓かれたのです。悪魔は、人間が「救われる」道が作られることを何としても阻止したかったのですが、それができなかったのです。

主イエスが 72 人の弟子たちを宣教に遣わしたとき、帰ってきた弟子たちの報告を受けて言われた内容に注目しましょう。

七十二人は喜んで帰って来て、言った。「主よ、お名前を使うと、悪霊どもでさえ、私たちに服従します。」イエスは言われた。「私は、サタンが稲妻のように天から落ちるのを見ていた。」

(ルカ 10:17-18)

イエスの御名の権威は悪霊たちを服従させ、悪魔の権力は失われました。

この巨大な竜、いにしへの蛇、悪魔ともサタンとも呼ばれる者、全人類を惑わす者は、地上に投げ落とされた。その使いたちも、もろともに投げ落とされた。(12:9)

ここで、悪魔について四つの言い換えがなされています。「巨大な竜」「いにしへの蛇」「悪魔ともサタンとも呼ばれる者」「全人類を惑わす者」と。「いにしへの蛇」とは、人類史の最初にアダムとエバを欺いた蛇のこと。「サタン」とは「告発者」を意味し、人間に罪を犯させる張本人が神にその罪を訴えるということをやっている者です。悪魔の目的は、人間を神に敵対させ、「神のもの」でなくならせることなのです。しかし、主イエスの十字架により、悪魔の告発は無効にされました。主イエスと共にある者を神は罪に定めることはなさらないのです。

本論 2. 勝利の宣言

そして私は、天で大きな声がこう語るのを聞いた。「今や、我々の神の救いと力と支配が現れた。神のメシアの権威が現れた。我々のきょうだいたちを告発する者、我々の神の前で昼も夜も彼らを告発する者が、投げ落とされたからである。」(12:10)

ここで大声を上げているのは、おそらく「二十四人の長老」だと思われます。それは、彼らが「我々のきょうだいたち」と言っているからです。彼らは悪魔の権力が打ち砕かれたこと、彼らの告発がもはやキリストを信じる者にとって意味をなさなくなったことを喜びました。主イエスが十字架で勝利を得られたことが、救済史に決定的な意味をもたらしたのです。悪魔は「昼も夜も」しつこく絶え間なく人間の罪を神に訴えてきましたが、主イエスを信じる者の罪はすべて「十字架で処理済み」「赦された罪」として神の御前に出されるだけです。そして、この救いにあずかった者は、感謝と喜びに溢れて救い主イエスを証しします。

きょうだいたちは、小羊の血と自分たちの証しの言葉とによって、この者に勝ち、死に至るまで命を惜しまなかった。(12:11)

ここで言われている「きょうだいたち」は、主イエスの証のゆえに迫害され殉教した人々を指すのでしょうか。時代によって、主を証しすることに伴うリスクは異なりますが、何事もなくキリストの証人として生きることはできません。真理を証しすることは勇気を伴い、それは悪魔が好まぬ道だからです。「その活動をやめよ」という反対者の声が聞こえてくる場合があります。また、偶像礼拝や暴力を強要されるような事態が起きる可能性もあるでしょう。しかし、そのときに私たちは愛と平和に立ち続ける勇気を主イエスによっていただきたい。あらゆる危機において適切な判断をするためには、日頃どのように備えて歩んでいるかが問われます。第一に、神の力を得るためには、日々の祈りと聖書の学びを欠かさず、神との関係を深めることが大切です。毎朝必ず御言葉を読み、その日に繰り広げられる見えない戦いに勝利するための武具を身に付けるのです。

悪魔の策略に対して立ち向かうことができるように、神の武具を身に着けなさい。私たちの戦いは、人間に対するものではなく、支配、権威、闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊に対するものだからです。(エフエソ 6:11-12)

つまり、立って、真理の帯を締め、正義の胸当てを着け、平和の福音を告げる備えを履物と
しなさい。これらすべてと共に、信仰の盾を手に取りなさい。それによって、悪しき者の放つ
燃える矢をすべて消すことができます。また、救いの兜をかぶり、霊の剣、すなわち神の言
葉を取りなさい。どのような時にも、霊によって祈り、願い求め、すべての聖なる者たちのた
めに、絶えず目を覚まして根気よく祈り続けなさい。(エフェソ 6:14-18)

神の力を証しするために重要な第二のことは、私たちの言葉と行動が一致しているという
ことです。なぜなら、言行が一致していないところに悪魔がつけ入りやすい隙が生まれるか
らです。主イエスが言葉と行為において常に一貫した方であったこと、この方の人格を宿す
ことによって私たちもそのようになれるということを心に刻んで歩んでまいりましょう。

本論 3. 戦闘の教会

それゆえ、もろもろの天と、そこに住む者たちよ、喜べ。地と海には災いあれ。悪魔は怒りに燃
えて、お前たちのところへ降って行った。残された時が少ないのを知ったからである。(12:12)
今日の箇所には何度も「(悪魔が) 投げ落とされた」という表現が出てきます。これは悪魔が
権力を打ち砕かれたことを意味しますが、そのときに悪魔は一つのことを悟りました。それ
は、「残された時が少ない」ということです。「残された時」とは、最後の審判までの時、言い
換えると、悪魔に最終的な審きが下る時、燃える火の池に投げ込まれる時です。

しかし、獣は捕らえられ、また、獣の前でしるしを行なった偽預言者も、一緒に捕らえられた。こ
のしるしによって、偽預言者は、獣の刻印を受けた者や、獣の像を拝んでいた者を惑わした
のである。獣も偽預言者も、生きたまま硫黄の燃え盛る火の池に投げ込まれた。(19:20)
悪魔はそのような終着点が明示され、もはや逃げ場を失った者として、最後の抵抗を始めま
した。「悪魔は怒りに燃えて、お前たちのところへ降って行った」と、残された時間の中でなし
うる限りの悪を行なうために活動を始めたのです。一人でも多くの信仰者を「転ばせ」よう
と。その活動期間は「1260 日」と言われますが、これは象徴的な数字で、それほど長くはな
いことを意味します。主イエスの十字架の御業から 2000 年以上の時間が流れましたが、この
「終末の時代」に悪魔は執念深く神の民を攻撃し続けます。そして、いずれ滅ぼされること
が分かっている「王国」の再建を試み、人間の権力者たちを用いて暗黒の帝国を築き上げて
いくでしょう。黙示録の講解を始めるに先立ち、岡山秀雄先生の『小羊の王国』という本を
引用させていただきました。その内容の一部をもう一度振り返ってみましょう。

「すなわち『獣の国』が象徴しているのは、一世紀のローマ帝国であるとともに、世界史の
中でたびたび現れた自己神格化した国家でもあり、また来臨直前の大きな苦難の時代(「三
年半」)に出現する、世界的な暗黒の帝国でもある。

黙示録が書かれたのは、一世紀末、強大なローマ帝国においてその富によって惑わされて
いる人々に警告を発し、その支配によって苦しめられている神の民を励ますためであり、ま
たすべての時代の神の民を奮い立たせ、来臨直前の全世界的な苦難の時代に向かって、民を
備え、整えるためである。」(p. 82-83)

「終末の時代には、『獣』化の頂点として、地球的な規模の巨大な帝国が出現するであろう。このような世界帝国の出現は、今世紀になって現実性を帯びてきている。経済活動においては、超巨大多国籍企業が国境を超えて資本を自由に移動させ、地球規模の経済帝国を築き上げている。また通信衛星などの情報伝達の急激な発達により、全世界は瞬時に結びつけられ、インターネットの急速な普及は、15 世紀グーテンベルクの活版印刷術以来、最大の情報革命であり、世界を劇的に変えつつある。世界の歴史はかつてない新しい局面を迎え、すでにその最終的な段階に達しつつあり、黙示録的な究極の世界が、今まさに現れようとしている。」(p. 132)

【結論】

私たちは、自分が生きている時代が歴史のどの段階にあるのかを、よく目を凝らして見る必要があります。霊的に眠っているとき、思わぬときに苦難は訪れるからです。今年に入ってから世界で起きてきている激動の一つひとつの意味を考えながら歩んでまいりましょう。目を醒ましているために、聖書の学びに励み、祈りに満ちた生活を志ざし、言葉と行動において一致した生き方を目指していきたい。日々、神からの力を受け、勝利者イエスと共にこの方を証しする生涯を歩み抜きたいと思います。

【祈り】

ご自身の民を愛し導き給う、天の父なる神様。聖書は、目で見える世界の背後で起きている霊的な世界を同時に描き、それは私たちの生きる現実と心の中の問題とも結びついていることを示しています。世の中で起きていることを霊的に見極める目を与えてくださり、また自分自身をも深く内省しながら、神が喜ばれる道を選び続けていくことができるよう、導いてください。この週も一人ひとりの人生にあなたが伴っていただきますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

古よりの悪魔の支配を終わらせるため、御子イエスを世に遣わし給うた、父なる神の愛、公生涯全体を通して悪魔と戦い、十字架と復活により救いの道を切り拓き給うた、主イエス・キリストの恵み、

聖徒たちを日々、神との交わりへと導き、光の武具で身を固めさせ給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。